

アメリカ合衆国の社会と文化の
理解のための
カリキュラム開発研究

第1集

1994年1月

広島大学国際理解教育研究会

**アメリカ合衆国の社会と文化の
理解のための
カリキュラム開発研究**

第1集

1994年1月

広島大学国際理解教育研究会

アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究 第1集

目 次

はじめに

I	本研究の概要	I
1.	研究主題	I-1
2.	研究団体	I-1
3.	研究組織	I-1
4.	研究実施計画	I-1
5.	研究目的	I-3
II	1993年度の研究の概要	II
1.	研究のねらい	II-1
2.	研究組織	II-1
3.	研究実施状況	II-3
III	1993年度の研究の内容	III
1.	事前研究	III-1
2.	予備調査	III-2
3.	現地調査	III-3
4.	事後研究	III-11
IV	1993年度の調査研究	IV
1.	チームAの調査研究	IV-1-1
	「アメリカ合衆国と日本の小学生の生活 ～地域の自然環境と生活とのかかわりを通して～」	
2.	チームBの調査研究	IV-2-1
	「中学生の世界～日本とアメリカの学校生活の違いの比較～」	
3.	チームCの調査研究	IV-3-1
	「子育てにみるアメリカ人の理想 ～しつけや日常生活からみた日米の比較～」	
4.	チームDの調査研究	IV-4-1
	「地域の人々の生活」	
5.	チームEの調査研究	IV-5-1
	「ノースカロライナ州の農民の生活」	

V	1993年度の教材開発	V
1.	チームAの教材開発	V-1-1
	「くらべてみよう！アメリカと日本の小学生の暮らし」	
2.	チームBの教材開発	V-2-1
	「アメリカと日本の中学校生活の比較」	
3.	チームCの教材開発	V-3-1
	「子育てにみるアメリカ人の理想 ～しつけや日常生活からみた日米の比較～」	
4.	チームDの教材開発	V-4-1
	「グリーンヴィル市におけるヴォランティア活動」	
5.	チームEの教材開発	V-5-1
	「ノースカロライナの農業～企業的農業と家族経営農業～」	
	「アメリカの大規模経営農業の現状～日本の農業との比較を通して～」	
	「アメリカ人の食生活と新しい農業」	
VI	1993年度の研究の評価	VI
1.	アメリカ合衆国現地調査の評価	VI-1
2.	各チームの研究の自己評価	VI-5
3.	イーストカロライナ大学スタッフによる他者評価	VI-12
VII	1993年度の研究の総括と今後の課題	VII
1.	1993年度の研究の総括	VII-1
2.	今後の課題	VII-3

[編集後記]

はじめに

本研究は主題に示したとおり、アメリカ合衆国の社会と文化の理解を図るための教材を開発し、広く教育実践に生かすことをねらっている。日本ではアメリカについてのニュース、映像、書物などがあふれており、国民のアメリカに対する関心は高いので、アメリカ理解のための教材化の条件は整っているといえるが、本研究の特色は、現に教室で授業をしている教師がチームをつくり、アメリカに乗り込み、自らの生活体験をとおして資料を集めて教材化したことにある。したがって、開発した教材は現場教師の教育的な感覚と問題意識に基づいて作成されたものだけに、教育実践にただちに役立ち、広く多くの教師のニーズに応え得るものになっている。

では、今なぜ、アメリカ合衆国の社会と文化の理解のための教材化か、ということをも最初に考えておきたい。戦後、日本の発展にとって日米関係は重要な主軸となってきたが、ベルリンの壁の崩壊に伴うソ連の解体と米ソの対立の解消により世界は多極化の方向をたどっている。これがややもすれば民族紛争を激化させることになり、世界は不安定な状況をかもし出している。こうしたとき、国連外交の強化やAPEC（アジア・太平洋経済協力閣僚会議）、EC（ヨーロッパ共同体）等の地域協力への努力により、世界の安定化がはかれつつあるが、我が国は新たな日米関係を構築することによって、世界の平和と繁栄に寄与する責任を負っていると考えられる。

アメリカ合衆国は国家の成立以来、自由と民主主義を標榜し、その実現に努めてきた国である。また、多様な移民を受け入れた多民族文化国家として発展してきた。これはまさに、これからの世界の進んでいく姿を一国の中に実現しているといえるであろう。したがって、アメリカ合衆国の社会と文化を理解することは、世界の多様な社会と文化を理解するための有効な手段となると思われる。

他国や他民族の文化を理解することは、文化のもつ個性ないしは価値を理解することであるが、それが容易に行われるならば世界に紛争は生じることはない。各国家や民族のもつ文化は個性をもち主張をもっているがゆえに、ともすれば独善的、排他的な性格を露呈するものである。したがって、他文化（＝異文化）を理解するに際しては、そこに「寛容な心」を必要とする。そして、何よりも、各国民や民族が求めている平和、自由、平等、博愛、人間性等の普遍的な価値を相互に評価し、協力し合う態度をもつことが大切になると思う。

日本はアジア・太平洋に位置し、近隣諸国・諸民族との協調を必要としている。この課題に応えるためにも、上記のように、本研究ではアメリカ合衆国の社会と文化を取り上げて、これらの理解を図り、広く国際理解教育のモデルをつくるための試みに着手した。

本研究は中国地方5県の小・中・高の各学校の教師と広島大学の教官によって実施したが、最初にも触れたように、課題別の5つのチームをつくり、各チームに英語科教師1名と社会科教師2名を配した。各チームは、それぞれ、自らの関心と問題意識によって研究テーマを設定し、事前研究を重ねたのち、現地での調査と資料の蒐集を行った。それぞれが、日本の教育現場における問題意識をもって現地調査にのぞいたので、日本の場合とアメリカ合衆国の場合を比較しながら研究を深めることによって、相違点と共通点を明らか

にすることが可能となった。また、ホームステイや現地の子ども、人びととの触れ合いを通して、より具体的に、しかも、より深く人間的な心情や生活の営みを理解することができた。ここで特筆しなければならないことは、アメリカ合衆国の主調査地をノースカロライナ州のグリーンビルとしたことにより、広島大学学校教育学部と学術研究の交流協定を結んでいるノースカロライナ州立イーストカロライナ大学の教官が各チームのコーディネーターとなり、懇切に、適切に指導をしてくれたことである。また、現地の受け入れ先の家庭、機関、施設の人びとは、チームのメンバーの調査に極めて協力的であった。

現場教師は教室での指導の目からアメリカ合衆国の社会と文化を調査し資料を集めたのであるが、上記のように、現地の人びととの接触による生活体験それ自体がアメリカの社会と文化の具体的側面の理解になっていったことに注目したいと思う。したがって、調査に当たった教師のホットな体験がそのまま自分の授業のための教材になり得るのである。それは、既存の資料よりも優れた教材としての価値をもっており、それを用いて学習する児童・生徒は、アメリカの社会と文化をより具体的に、リアルに理解できるといえる。

本研究のいまひとつの特色は、たえず評価を取り入れたことである。これは、参加者による自己評価、指導教官による評価、わけでも、津田塾大学國枝マリ助教授による評価等の他者評価も含めて多面的に診断・評価し、研究目的、教材の適切性、現地調査等の観点にしたがって改善の方向を示した。その結果は、次回の調査研究に生かされることになっている。

ここに集録された報告内容は、単なる調査の経過の報告や参加者の授業実践の報告ではない。むしろ、これは開発した教材集であり、教材バンクである。それをひもといて広く教師が授業に生かすことのできるようにまとめた教材化ハンドブックであり、教材化資料集である。この意図は、現地調査した教師だけのアメリカ理解にどどまるのではなく、その他大勢の教師に自らの体験としての教材を分かち合い、共に理解を深めていくためのデータバンクとしたいというねらいをもっている。

本研究が示しているように、アメリカ合衆国の社会と文化を理解することを目指しているが、研究の実施とその所産である教材は、極めて具体的である。しかも、調査研究に当たる現場教師の問題意識が教材の価値を高めることになる。このことは、逆説的ではあるが、アメリカ合衆国の社会と文化の理解を進めることは、我が国の社会と文化をよりはっきりと明らかにすることを意味している。このことを前提として考えると、アメリカ側に同様な教師集団のパートナーがおり、彼らとの共同研究を行うことによって、相互のネットワークづくりが可能になり、真の意味の相互理解が実現するのではなかろうか。また、相手国の社会と文化の理解ということを教育の問題として取り上げるとき、そこに必然的に相互の国の教育制度、カリキュラム政策、授業構成等について評価、検討する必要にせまられるであろう。こうしたとき、今回の研究に参加した教師は、これからの教育の革新に対して貴重な提言をすることができるのである。

最後になったが、本研究を進めるに当たって多くの方のご援助をいただいた。特に、米日財団からの資金援助がなければ、本研究はあり得なかったであろう。調査研究の実施についても、イーストカロライナ大学教育学部長コーブル教授、イーストカロライナ大学国際プログラム副所長スペンス教授はじめ関係教授、それにグリーンビル市当局、ミネソタ大学エンロー教授、ミネソタ州教育局ワンゲン指導主事等の指導を得た。事前・事後指導

では、広島大学永井滋郎元教授，同中山修一教授，津田塾大学國枝マリ助教授のお世話になった。また，研究の企画・運営及び現地指導では，広島大学小篠敏明教授，同小原友行助教授，深沢清治助教授のリーダーシップによった。研究の主役はいうまでもなく中国地方5県から選抜された現場教師である。その他，各県・市・町の教育委員会，広島大学からの協力を忘れることはできない。これら多くの方々，団体，機関に対して深甚の謝意を表したいと思う。

1994年1月1日

広島大学国際理解教育研究会
研究代表者 広島大学学校教育学部教授
溝 上 泰

I 本研究の概要

1. 研究主題

「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」

2. 研究団体

広島大学国際理解教育研究会

〒734 広島市南区東雲三丁目1番33号

広島大学学校教育学部

電話 082-281-3141

FAX 082-284-2406

3. 研究組織

(1) 研究代表者

広島大学 学校教育学部 教授 満上 泰 (社会科教育学)

(2) 研究分担者

広島大学 学校教育学部 教授 小篠 敏明 (英語教育学)

広島大学 教育学部 教授 中山 修一 (地理学)

広島大学 学校教育学部 助教授 小原 友行 (社会科教育学)

(3) 研究協力者 (15名, 中国地方5県の小学校・中学校・高等学校教諭)

4. 研究実施計画

(1) 実施主体

本研究の実施主体は、広島大学学校教育学部及び教育学部に所属する社会科教育及び英語教育の教授を中心とし、附属小・中・高等学校の教諭を協力者とする研究チームとする。

(2) 参加教員

参加教員(教育委員会指導主事, 教育センターの指導主事及び大学附属学校教員を含む)は、中国地方5県(広島県, 山口県, 島根県, 鳥取県及び岡山県)から、合計15名を選定する。

参加教員の選定については、各県・市の教育委員会との協力体制の下に、教育委員会及び大学附属学校の推薦に基づいて行うが、選定に当たっては、各地域の教育を積極的に推進している有能な教員の内から、応募者のもつ関心・意欲, 教育実践力, 研究心, 指導性, 人格等を総合的に評価し、地域の教育指導者としての適性を十分考慮する。

なお、参加教員の担当教科は、主として社会科, 地理歴史, 公民, 理科, 外国語とす

る。

(3) 研究期間

- ① 研究期間は3か年とし、1993年1月に開始し、1995年12月に終了させる。
第1年次（1993.1-1993.12）…現地調査（1993.8）
第2年次（1994.1-1994.12）…現地調査（1994.8）
第3年次（1995.1-1995.12）…現地調査（1995.8）
- ② 単年度の研究は各々、その年の1月に始まり、12月に終了する。
- ③ 単年度の研究サイクルは次の通りである。
1月～7月 事前研究として月例研究会を開き、講義、研究計画、研究発表及び協議等を行う。
8月 現地調査。
9月～12月 事後研究として研究会を開き、教材開発、授業その他における生かし方の研究、研究の評価及び研究のまとめ等を行う。
1月～3月 報告書作成。
4月～ 研究成果の啓蒙・普及活動。

(4) 各年次の研究主題と調査の主眼

- ① 第1年次 「自然環境と人々の生活」…アメリカ合衆国の各地域における人々の生活の様子を明らかにする。
- ② 第2年次 「歴史的遺産と人々の生活」…アメリカを築き発展させた人物の足跡と人々の生活への影響を明らかにする。
- ③ 第3年次 「環境、多民族・多文化等の問題」…環境問題への人々の関心と解決のための活動を明らかにする。多民族間の相互理解と尊重の実態を明らかにする。

(5) 米国側の協力先

- ① ミネソタ大学
- ② インディアナ大学
- ③ メリーランド大学
- ④ イーストカロライナ大学

(6) 評価

評価については、年次計画の細案の作成、実施計画、研究会の実施、現地調査、フォローアップ等の過程において、自己評価と他者評価を行い、プログラムの診断、アセスメントを通して、その有効性・妥当性等を求めるとともに、次年度の計画実施に役立てるようにしたい。

その際、他者評価については、企業家、ジャーナリスト、大学教官、学校の教員、兵庫教育大学等の経験者、財団関係者等各方面から幅広い意見聴取を行う。

作成した教材の活用及び実践に当たっては、他の教員、生徒の反応に注意し、普及と

改善に努める。また、学校のみならず、参加教員の所属する地域の公民館等におけるデモンストレーションを通して、地域住民からの評価を得るようにしたい。

(7) 研究成果の普及活動と研究の発展

- ① 各地域の一般教員，教育委員会指導主事，教育センター指導主事，大学附属学校教員，大学教官等の幅広いプログラム参加者によって，各学校での実践や地域の公民館等での活動を通して，研究成果の啓蒙・普及の活動を行う。
- ② 各参加教員の所属する学校を国際理解のための拠点校として育成する。また，拠点校を通して，地方の教育委員会，産業界，住民への理解を拡大していく。
- ③ 学校における国際理解教育の実践のみならず，公民館の講座，ユネスコ活動に協力する。
- ④ 広島大学は，県・市教育センター，教育委員会，文部省初等中等教育局，文部省国際学術局と連携を深め，国際理解教育の推進に努める。
- ⑤ 参加者は，地域の国際交流団体，例えばフルブライト同窓会，日米協会，ユネスコ協会等の活動に協力し，各種の理解を得るようにする。
- ⑥ 地域の新聞・テレビ等のマスコミに，実践活動を紹介する。
- ⑦ 広島大学附属小・中及び高等学校に国際理解室を設置し，教材を整理して教師が活用できるようにデータベースを整備し，カリキュラム編成のための資料を完備する。

5. 研究目的

(1) 研究の目的

東西の冷戦構造の崩壊により世界情勢は多極化の方向をたどっているが，世界の平和を持続するためには，日米関係を主軸とした，新世界秩序の形成が望まれている。しかし，日米間には自動車，農産物等の問題をめぐって経済摩擦が生じている。これら困難な課題を解決し，望ましい日米関係を構築するに当たっては，政治，外交，経済における修復努力による成果が期待されている。これにとどまることなく，長期的展望に立って，日米関係を堅実にし，新世界秩序を維持するには，相互理解を深めるための学校教育の役割が大きいと思われる。

アジア・太平洋地域に位置している我が国としては，この地域の諸国民との相互理解を図るとともに，地球的規模の諸問題の解決を目指すいわゆる国際理解教育を推進することが課題となっている。この立場から日米の相互理解を深めるための教育活動は，国際理解教育の理論と実践の確立に資することができると考えられる。

本研究では，現場教師が教育実践を通して得た課題をもって，アメリカ合衆国の社会と文化に直接触れることによって，その新鮮な教材を蒐集し，学校における教育実践に生かすことをねらっている。そのため，教師から提起された課題を整理し，研究の目標を明確にするとともに，現地調査のためのいくつかの視点と方法を導き出したうえで，教材開発のための調査旅行を実施する。そこで得られた種々の教材を活用した授業を行うことによって，アメリカ合衆国の社会と文化に対する理解を深め，思考力や資料活用能力を伸張させ，社会と文化のもっている価値を尊敬しようとする態度や心情を養う

ようにする。

このように、本研究は、アメリカ合衆国を理解することを直接ねらっているが、同時に、この具体的な事例に基づいて、国際理解教育のモデルを作成することを目指している。そして、アジア・太平洋地域、または、その他の地域の理解に際して、それを応用できる能力を身につけ、益々緊密になっていく国際社会に正しく対処し、その発展に貢献できる人間として育成することを目的としている。

(2) 研究の視点

アメリカ合衆国を理解するに当たっては、国際理解教育の視点をユネスコ憲章や第18回ユネスコ総会勧告から導き出すことにしたい。また、アメリカ合衆国を理解することはアメリカ合衆国の社会と文化を理解することを指しており、更には、日米関係の理解を含めることができる。また、アメリカ合衆国の理解は、その過程や結果において、日米の相互理解と相互協力に発展しなければならないのである。

① アメリカ合衆国の文化の理解

ここでいうアメリカ合衆国の理解とは、換言すれば、アメリカ合衆国のもっている文化の理解を意味している。文化の中には、高尚な精神文化と日常の生活文化があるが、本研究では、後者の人々の生活文化に主眼を置き、その背景を知るために精神文化を取り上げるようにしたい。人々の生活文化とは、人々のものの見方やものの考え方を指しているといえるであろう。このような人々のもっている生活文化は、日本人の眼から見ると異文化である。したがって、アメリカ合衆国の理解とは、異文化としてのアメリカ人の生活文化を理解することになる。そのため、本研究は、アメリカ人の生活に触れ、かれらの生き方にせまるようにする。家庭、学校、コミュニティ、職場等において、アメリカの普通の子供たちや大人たちはどんな生活様式に馴れているか、自分たちの生活に対してどんな考えをもって、日々を過ごしているかを明らかにしたいと思う。

② アメリカ人の生活の理解

アメリカ人の生活は、日本人の眼から見ると異質であるけれども、自然や人間に対する愛情は相互に共感し合えるであろう。そこにわれわれは、日本人、アメリカ人に共通する人間愛や自然愛を見出すことが可能であろう。このような共通な人間性に着目しながらも、アメリカ合衆国のもつ広大な大自然の下での生活様式は、極めて多様性に富んでいる。アメリカ合衆国を南部から北部にかけて、また、東部から西部にかけて地域区分を試みると、それぞれの地域における人々の生活は相違している。その上、アメリカ合衆国は多様な人種や民族によって構成されているので、生活様式の多様性ということがアメリカ合衆国を特徴付けるものとなっている。

③ アメリカ合衆国を支える歴史的伝統の理解

次に、アメリカ合衆国は建国わずか200年過ぎの短い歴史をもった国であるが、人々はこの国が築いた遺産を大切に保存し、後世に伝えている。また、開拓者の精神がアメリカ人の生活の中に受け継がれていることに注目したいと思う。アメリカ合衆国の精神的基盤である自由や平等、開拓者精神等は、合衆国の発展の過程において醸成されてきた。したがって、現代のアメリカ合衆国を支える歴史的伝統は、具体的にどのようにして形成されたのかについて研究することが求められる。

④ アメリカ合衆国における環境問題解決の努力の理解

アメリカ合衆国及び日本は高度産業社会を形成している。それは科学技術の進歩により、高度な技術を用いて生産を上げ、人々が物質的に豊かな生活を享受できる社会である。しかし、産業は、自然を利用することによって発展しており、かつ廃棄物の排出を伴うものであるため、環境問題を避けて通ることはできなくなっている。また、環境問題は産業社会に限ることなく、発展途上国においても深刻な問題になっており、まさに地球規模の問題になっている。そこで、われわれの関心は、アメリカ合衆国が、環境問題の解決にどのように取り組んでいるか、家庭、学校、コミュニティ、職場、州や国家において環境問題の解決へ向けてどのような努力が払われているかを明らかにしたい。そして、環境問題の解決に向かってどのように対処しているかを改めてみつめ直すことが、われわれ日本人として大切になる。

II 1993年度の研究の概要

1. 研究のねらい

- (1) アメリカ合衆国の生活文化と日本の生活文化を相互に理解するための5つのテーマについての教材開発を行う。
※教材開発の形式…ビデオ，スライド，絵・写真，文書・統計資料などを使った教材集
- (2) アメリカ合衆国での現地教師の協力による現地調査やワークショップを通して，アメリカ理解学習と日本理解学習の情報・教材の交換を行うとともに，相互理解のための教材開発を日米教師の共同で試みる。また，その過程で日米教師間のネットワークをつくる。
- (3) アメリカでの異文化体験を通して，参加教師の国際理解を深める。
- (4) 参加教師の学校・家庭・地域社会の中での実践を通して，子供たちの国際理解を図る。
- (5) この研究を通して，生活文化を相互に理解するためのカリキュラム開発の視点を発見する。

2. 研究組織

(1) 研究代表者

広島大学 学校教育学部 教授 溝上 泰 (社会科教育学)

(2) 研究分担者

広島大学 学校教育学部 教授 小篠 敏明 (英語教育学)

広島大学 教育学部 教授 中山 修一 (地理学)

広島大学 学校教育学部 助教授 小原 友行 (社会科教育学)

(3) 研究協力者

① チームA

広島大学附属東雲小学校 教諭 富村 誠 (社会科)

広島県広島市立本川小学校 教諭 庄野 英憲 (社会科)

島根県島根町立野波中学校 教諭 田尻 悟郎 (英語科)

② チームB

広島県広島市立清和中学校 教諭 松田 和彦 (社会科)

広島県広島市立落合中学校 教諭 殿垣内 実 (社会科)

- 山口県岩国市立藤河中学校 教諭 白石 真理子 (英語科)
- ③ チームC
 広島大学附属東雲中学校 教諭 小嶋 祐伺郎 (社会科)
 岡山大学教育学部附属中学校教諭 今福 茂樹 (社会科)
 広島県広島市立亀山中学校 教諭 東岡 理恵 (英語科)
- ④ チームD
 広島大学附属中・高等学校 教諭 田中 泉 (社会科)
 鳥取県米子市立尚徳中学校 教諭 根平 雄一郎 (社会科)
 岡山県立朝日高等学校 教諭 鷹家 秀史 (英語科)
- ⑤ チームE
 広島県立安芸府中高等学校 教諭 和田 文雄 (社会科)
 山口県徳地町立堀中学校 教諭 山本 英明 (社会科)
 広島大学学校教育学部 助教授 深沢 清治 (英語教育学)

(4) アメリカ合衆国側のコーディネーター

- ドナルド・スペンス (イーストカロライナ大学国際プログラム副所長)
 ウォルター・エンロー (ミネソタ大学国際理解教育研究所副所長)

(5) アメリカ合衆国側の研究協力者

① チームA

- ジョン・スウォープ (イーストカロライナ大学教育学部副学部長)
 レベッカ・ブレント (イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課教授)
 シンシア・ロジャース (ミネソタ州社会科指導主事)

② チームB

- ドナルド・スペンス (イーストカロライナ大学国際プログラム副所長)
 グレゴリー・ヘスティング (イーストカロライナ大学継続教育課課長補佐)
 クリスティン・ソングスト (ミネソタ州ミネアポリス市小学校教諭)

③ チームC

- H. C. ハジンス (イーストカロライナ大学教育学部教育指導課長)
 エドウィン・ベル (イーストカロライナ大学教育学部教育指導課教授)
 キティ・エンロー (ミネソタ州ミネアポリス市小・中学校教諭)

④ チームD

- ベティ・リピー (イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課長)
 チャールズ・コーブル (イーストカロライナ大学教育学部学部長)
 ジェームス・ウェストモーランド (イーストカロライナ大学就職指導課課長)
 ウォルター・エンロー (ミネソタ大学国際理解教育研究所副所長)

⑤ チームE

- ダイアナ・ヘンショウ (イーストカロライナ大学継続教育課課長)
 パトリシア・キャンベル (イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課教授)

デール・エリクソン（ミネソタ州高等学校数学教諭）

⑥ その他

ジェニファー・ウィンザー（ミネソタ大学大学院生）

ロジャー・ワンゲン（ミネソタ州教育省社会科調査官・国際理解教育課課長）

ボブ・エリクソン（ミネソタ州教育省グローバル教育センター所長）

3. 研究実施状況

(1) 事前研究…4月～7月（教材案の作成・検討，広島市）

- ① 第1回研究会…1993年 4月25日（日）
- ② 第2回研究会…1993年 5月30日（日）
- ③ 第3回研究会…1993年 6月26日（土）～ 6月27日（日）
- ④ 第4回研究会…1993年 7月25日（日）

(2) アメリカ合衆国予備調査

- ① 調査者（2名）…小篠敏明教授・小原友行助教授
- ② 時期…1993年7月3日（土）～7月12日（月）
- ③ 調査場所…ニューヨーク→グリーンビル→ワシントンD. C. →ミネアポリス

(3) アメリカ合衆国現地調査（ホームステイ及びワークショップを含む）

- ① 調査者（17名）…小篠敏明教授・小原友行助教授，研究協力者15名
- ② 時期…1993年7月29日（木）～8月12日（木）
- ③ 調査場所…ニューヨーク→グリーンビル→ワシントンD. C. →ミネアポリス

(4) 事後研究…9月～11月（教材開発，広島市）

- ① 第5回研究会…1993年 9月11日（土）～ 9月12日（日）
- ② 第6回研究会…1993年10月11日（月）～10月12日（火）
- ③ 第7回研究会…1993年11月14日（日）

(5) 報告書作成…1993年12月～（報告書づくり）

(6) 普及・実践…1993年 9月～

Ⅲ 1993年度の研究の内容

1. 事前研究

(1) 第1回研究会

- ① 日 時：1993年4月25日（日） 10:00～15:00
- ② 場 所：広島大学学校教育学部会議室
- ③ 内 容：・本年度の研究テーマ・研究計画の決定
・國枝マリ先生（津田塾大学）の指導・助言
- ④ 資 料：第1回研究会の日程，研究計画書，研究員一覧表，1993年度研究スケジュール案，その他

(2) 第2回研究会

- ① 日 時：1993年5月30日（日） 10:00～15:00
- ② 場 所：広島大学学校教育学部会議室
- ③ 内 容：・講義「アメリカの地理教育」
（中山修一先生，広島大学教育学部教授）
・アメリカでのワークショップの内容の検討
・研究チームの研究経過報告・検討会
・小栗 章氏（米日財団東京事務所）との懇談
- ④ 資 料：第2回研究会の日程，中山修一「アメリカの地理教育」講義要旨，中山修一「合衆国地理教育ガイドラインにみる地理的見方・考え方」『新地理』第40巻，第2号，1992.9，国際地理学連合・地理教育委員会編「地理教育国際憲章」『地理科学』第48巻，第2号，1993，予備調査・現地調査の日程案，教材開発の形式例，研究チーム別の研究経過報告書，研究チーム別の現地調査項目案，その他

(3) 第3回研究会

- ① 日 時：1993年6月26日（土） 16:00～21:00
1993年6月27日（日） 9:30～15:00
- ② 場 所：広島大学学校教育学部326号教室及び会議室
- ③ 内 容：教材開発のためのワークショップ
・講義「国際理解教育の課題」
（永井滋郎先生，国際理解教育学研究所長，元広島大学教授・元鳴門教育大学教授，帝塚山学院大学国際理解研究所客員教授）
・アメリカ現地調査の案内
・研究チーム別の教材作成
- ④ 資 料：第3回研究会の日程，永井滋郎「国際理解教育の課題」講義要旨，永井滋郎「国際理解教育学の成立について」日本国際教育学会『国際教育』創刊号，1992，同「国際理解教育カリキュラム化の視点」全

国社会科学教育学会『社会科学教育論叢』第40集，1993，田中泉他
「高等学校世界史における国際理解教育の教材開発」広島大学教育学部『学部附属共同研究体制研究紀要』第21号，1993，現地調査の日程案，研究チーム別の教材案，その他

(4) 第4回研究会

- ① 日時：1993年7月25日（日） 10:00～15:00
- ② 場所：広島大学学校教育学部会議室
- ③ 内容：
 - ・予備調査の報告及び質疑応答
 - ・アメリカ現地調査の最終案内
 - ・研究チーム別の教材作成
- ④ 資料：第4回研究会の日程，アメリカでの現地調査・ワークショップの記録の仕方，現地調査の日程（英文），現地調査のパートナー・テーマ・目的・調査項目（英文），Charles R. Coble "THE ORGANIZATION OF AMERICAN EDUCATION"，予備調査の報告書，予備調査のスライド，アメリカ現地調査案内書，研究チーム別の教材案，ワークショップでの提出資料，その他

2. 予備調査

- (1) 調査者（2名）…小篠敏明教授・小原友行助教授
- (2) 時期…1993年7月3日（土）～7月12日（月）
- (3) 調査場所…ニューヨーク→グリーンビル→ワシントンD. C. →ミネアポリス
- (4) 現地調査・ワークショップの打ち合せのための研究協力者
 - ① グリーンビルでの面会者
 - ドナルド・スペンス（イーストカロライナ大学国際プログラム副所長）
 - チャールズ・コーブル（イーストカロライナ大学教育学部学部長）
 - ジョン・スウォープ（イーストカロライナ大学教育学部副学部長）
 - H. C. ハジンス（イーストカロライナ大学教育学部教育指導課長）
 - ベティ・リビー（イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課長）
 - ダイアナ・ヘンショウ（イーストカロライナ大学継続教育課課長）
 - パトリシア・キャンベル（イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課教授）
 - ② ミネアポリスでの面会者
 - ジェニファー・ウィンザー（ミネソタ大学大学院生）
 - ロジャー・ワンゲン（ミネソタ州教育省社会科調査官・国際理解教育課課長）
 - ポブ・エリクソン（ミネソタ州教育省グローバル教育センター所長）

(5) 旅程

7月 3日 (土)

19:20 大阪空港出発 (NW 070便)

19:30 ニューヨーク到着

7月 4日 (日)

11:40 ニューヨーク出発 (AA1049便)

13:10 ローリーダーラム (ノースカロライナ州) 到着

14:20 ローリーダーラム出発 (AA3334便)

15:05 グリーンビル (ノースカロライナ州) 到着

7月 5日 (月)

グリーンビル滞在 (研究打ち合せ)

7月 6日 (火)

13:45 グリーンビル出発 (AA3333便)

14:25 ローリーダーラム到着

15:10 ローリーダーラム出発 (AA 462便)

16:10 ワシントンD. C. 到着

7月 7日 (水)

ワシントンD. C. 滞在 (予備調査)

7月 8日 (木)

14:15 ワシントンD. C. 出発 (NW1511便)

15:56 ミネアポリス (ミネソタ州) 到着

7月 9日 (金)

ミネアポリス滞在 (研究打ち合せ)

7月10日 (土)

11:30 ミネアポリス出発 (NW 007便)

7月11日 (日)

17:00 成田空港到着

7月12日 (月)

東京出発 (新幹線) , 広島到着

3. 現地調査

(1) 調査者 (17名) …小篠敏明教授・小原友行助教授, 研究協力者15名

(2) 時期…1993年7月29日 (木) ~8月12日 (木)

(3) 調査場所…ニューヨーク→グリーンビル→ワシントンD. C. →ミネアポリス

(4) アメリカ合衆国側の現地調査の協力者

① チームA

ジョン・スウォープ (イーストカロライナ大学教育学部副学部長)

レベッカ・ブレント（イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課教授）
シンシア・ロジャース（ミネソタ州社会科指導主事）

② チームB

ドナルド・スペンス（イーストカロライナ大学国際プログラム副所長）
グレゴリー・ヘスティング（イーストカロライナ大学継続教育課課長補佐）
クリスティン・ソンガスト（ミネソタ州ミネアポリス市小学校教諭）

③ チームC

H. C. ハジンス（イーストカロライナ大学教育学部教育指導課長）
エドウィン・ベル（イーストカロライナ大学教育学部教育指導課教授）
キティ・エンロー（ミネソタ州ミネアポリス市小・中学校教諭）

④ チームD

ベティ・リビー（イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課長）
チャールズ・コーブル（イーストカロライナ大学教育学部学部長）
ウォルター・エンロー（ミネソタ大学国際理解教育研究所副所長）

⑤ チームE

ダイアナ・ヘンショウ（イーストカロライナ大学継続教育課課長）
パトリシア・キャンベル（イーストカロライナ大学教育学部初等中等教育課教授）

デール・エリクソン（ミネソタ州高等学校数学教諭）

⑥ その他

グリーンビル市内の小・中学校教諭，多数（各チーム調査研究の報告，参照）
ジェニファー・ウィンザー（ミネソタ大学大学院生）
ロジャー・ワンゲン（ミネソタ州教育省社会科調査官・国際理解教育課課長）
ポブ・エリクソン（ミネソタ州教育省グローバル教育センター所長）

(5) 旅程

7月29日（木）

19:20 大阪空港出発（NW 070便）

19:30 ニューヨーク到着

7月30日（金）

ニューヨーク滞在（フィールドスタディ）

7月31日（土）

11:40 ニューヨーク出発（AA1049便）

13:10 ローリーダーラム（ノースカロライナ州）到着

14:00 ローリーダーラム出発（チャーターバス）

16:00 グリーンビル（ノースカロライナ州）到着

8月 1日（日）

午前 教会訪問

正午 ピクニックランチ

午後 フィールドスタディ

	夜	カーボーイバンドの見学
8月	2日(月)	
	10:00	日本側チームのプレゼンテーション
	12:00	昼食
	13:15	ワークショップ：教材作成
	15:30	コーブル学部長主催のレセプション
	19:00	ディナー（イーストカロライナ大学主催）
8月	3日(火)	
	午前・午後	フィールドスタディ
	夜	ホームステイホストとのヒッグピッキング ホームステイ
8月	4日(水)	
	午前	フィールドスタディ
	午後	ワークショップ：教材作成 ホームステイ
8月	5日(木)	
	午前・午後	報告書作成
	夜	フレンドシップパーティ（広島プロジェクト主催）
8月	6日(金)	
	11:00	グリーンビル出発（チャーターバス）
	15:10	ローリーダーラム出発（AA 462便）
	16:10	ワシントンD. C. 到着
8月	7日(土)	
		ワシントンD. C. 滞在（フィールドスタディ）
8月	8日(日)	
	14:15	ワシントンD. C. 出発（NW1511便）
	15:56	ミネアポリス（ミネソタ州）到着
	夜	ミネソタ州メンバーとの夕食会
8月	9日(月)	
	午前・午後	ミネソタ州メンバー協力によるフィールドスタディ
	夜	ミネソタスタイルバーベキューパーティー（ワンゲン氏宅）
8月	10日(火)	
	11:30	ミネアポリス出発（NW 007便）
8月	11日(水)	
	17:00	成田空港到着
8月	12日(木)	
		東京出発（新幹線），各地到着

(6) 現地調査における各チームの調査内容

① チームA

メンバー：富村 誠，庄野 英憲，田尻 悟郎

指導助言：小原 友行

ジョン・スフォープ博士，レベッカ・ブレント博士

研究課題：日米の小学生の生活

調査内容：(1)小学生の学校生活の研究

(2)家庭生活や地域社会での生活の研究

調査活動：(1)自然環境に関する資料の収集と作成

①写真撮影（川，草原，タバコ畑，運河など）

②自然環境を生かした産業に関する資料収集（パンフレット，冊子，生産者）

(a)産業別人口，生産額

(b)生産の様子，手順などが分かるもの

(2)子供たちの夏休みの過ごし方を紹介する資料の作成

①家で過ごしている子供の家庭を訪問する

②キャンプに参加している子供を訪問する

（もし遠いところでキャンプしていれば再考する）

(3)地域の特性を生かした産業（タバコ農家経営者など）の従事者の子供を紹介する資料の作成

①生産者へのインタビュー

(a)生産を高める工夫

(b)自然災害から作物を守る工夫

② チームB

メンバー：松田 和彦，殿垣内 実，白石真理子

指導助言：小原 友行

ドナルド・スペンス博士，グレゴリー・ヘスティング博士

研究課題：アメリカ合衆国の中学生の生活

調査内容：(1)中学生の1日の学校生活の調査

(2)中学生の1年間の学校行事の調査

(3)中学生の校則の調査

調査活動：(1)アメリカの中学生への日本に関するアンケートの実施

(2)アメリカ側の教師への依頼

①1年間のおもな学校行事

②1日の学校生活（日課）

③ある中学校の校則

をスライドやVTR・プリントなどで用意しておいて欲しい。

(3)現地調査では

①中学校の施設の見学

②中学生のサマーキャンプなどがあれば見学させてほしい。

(4)チームBからアメリカ側へ提供できるもの

①1年間のおもな学校行事，1日の学校生活，校則のスライドや

- VTR・プリント資料など（1部ずつ）
 - ②中学校地理の教科書と地図帳（2部ずつ）
 - ③学校生活や広島のマニアアルバム（2部ずつ）
 - ④壁掛け世界地図（20部）
 - ⑤広島の川辺のスケッチ（20部）
 - ⑥米の3点セット…種モミ，稲作VTR，米の料理集（1部）
- (5)要望
フレンドシップパーティーでは，米食料理を出したい。

③ チームC

メンバー：小嶋祐何郎，今福 茂樹，東岡 理恵

指導助言：小篠 敏明

H. C. ハジンス博士，エドウィン・ベル博士

研究課題：子育てにおけるアメリカ人の理想一日米の比較研究—

調査内容：(1)日米の親子関係，家庭教育，学問，遊び，宗教生活などの比較
(2)「典型的アメリカ人」と「理想的アメリカ人」のイメージの調査
(3)文化の伝達の比較

調査方法：(1)訪問調査

(2)現地調査

ホームステイの要望：

- (1)小学校高学年の児童のいる家庭，または高校生のいる家庭
- (2)メンバーの二人と一緒に宿泊するのであれば，農家
- (3)それぞれのメンバーが別々に宿泊するのであれば，多様な民族や職業の家庭

質問項目：（子供に対して）

1. あなたの家族は何人ですか。
2. あなたは何人兄弟姉妹ですか。
3. 年齢，性別，家の職業
4. あなたは次の項目の中で，将来何を大切に生きていきたいですか。
[仕事，自分の趣味を大切にする，家庭を大切にする，地域社会（国家）への貢献]
5. 夕食を家族揃って食べるのは1週間にどれくらいありますか。
[ほぼ毎日，3～4日，1～2日，全くない]
6. あなたは，食事の支度や片付けを手伝いますか。
[毎日手伝う，自分の分担のときに，親に言われれば，ほとんどしない]
7. あなたは，家庭の中で仕事の分担がありますか。
8. 7で答えた仕事に対する報酬はありますか。
9. あなたの洋服はだれが買いますか。
[親，自分，親と一緒にいくが選択権は自分（親）]

10. あなたの衣類の整理や片付けは誰がしますか。
11. あなたはお小遣いをもらいますか。
12. あなたは、困ったときにだれに悩みを相談しますか。
[母親, 父親, 兄弟姉妹, 友人, 先生, その他]
13. あなたは、自分の部屋をいつころ与えられましたか。
[小学校に入る前, 小学校3年生まで, 小学校6年生まで, 中学に入ってから]
14. あなたは自分の部屋の掃除を自分でしますか。
15. あなたは、いつ頃から、朝自分で起きるようになりましたか。
[小学校に入る前, 小学校3年生まで, 小学校6年生まで, 中学に入ってから]
16. あなたの親は、夜、子供だけを残して外出することがあります
か。
[よくある, ときどきある, まれにある, ほとんどない]
17. 学校以外で何か活動したり、所属しているものがありますか。
[スポーツ活動, 芸術・文化活動, ボランティア活動, 学習塾,
参加していない]
(親に対して)
 1. 家庭が子供に果たす役割で、最も大切だと思うことは、次のど
れですか。
[自立を援助する, 社会規範を身に付けさせる, しつけをする]
 2. 子供に与える報酬の目的は何ですか。

④ チームD

メンバー：田中 泉, 根平雄一郎, 鷹家 秀史

指導助言：小篠 敏明

ベティ・リビー博士, チャールズ・コーブル博士

研究課題：地域社会での人々の生活

調査内容：(1)保育園で子供はどんなことをしているか

(2)地域社会での宗教生活

例) 地域の教会では何が行われているか

(3)老人は老人ホームでどのような日常生活を送っているか

(4)障害者は地域社会での生活にどのように参加しているか

(5)人々の地域社会にどのように貢献しているか

(ボランティアは貧しい人や障害者に対してどのような活動をし
ているか)

調査活動：(1)教会での取材

①できれば日曜日にパートナーと教会へ行きたい。

②もし可能であれば、教会でVTR撮影をしたい。

③集いのあとでインタビューがしたい(牧師・参加者)。

④ボランティアにかかわる活動が行われていれば取材したい。

(2)施設での取材

①老人ホーム，障害者施設，保育園などの施設で，取材（インタビュー，VTR撮影）を行いたい。

②ボランティアがいれば取材を行いたい。

(3)社会福祉事務所のような機関での取材

①ボランティアにかかわることを扱っていれば取材したい。

(4)学校でのPTA活動の取材

①学校でのPTA（または地域住民）によるボランティアにかかわることがあれば取材したい。

調査項目：(1)教会と地域の人々のつながり

- ・どこの教会へ行くか（宗派—カトリックORプロテスタント，その他）
- ・いつ教会へ行くか（頻度—毎日，日曜日，時々）
- ・誰と教会へ行くか（1人，家族と，友人と，その他）
- ・教会では信仰活動以外に何をするか（ボランティア活動，親睦活動）
- ・ボランティア活動があるとすればどのような形で行うか
- ・なぜボランティア活動を行うか

(2)老人ホームなどの施設と人々のつながり

- ・どのようなシステムで運営されているか
- ・職員は何人いるか（老人数との比較）
- ・医療体制をどうか
- ・費用は誰が負担するか
- ・家族との交流はあるか
- ・ボランティア活動によるものがあるか
- ・どのような人がボランティア活動を行うか
- ・なぜボランティア活動を行うか

(3)その他，コミュニティセンターやボランティア活動の在り方

- ・どのような活動が行われているか
- ・ボランティア活動はどのようにして行われているか
- ・どのような人がボランティア活動を行うか
- ・なぜボランティア活動を行うか

⑤ チームE

メンバー：和田 文雄，山本 英明，深沢 清治

指導助言：小篠 敏明

ダイアナ・ヘンショウ博士，パトリシア・キャンベル博士

研究課題：ノースカロライナ州の農民の生活

調査内容：(1)グリーンビル付近の農家，できれば2つ以上の異なるタイプの対照的な農家（例えば，個人的経営と企業的経営）を訪問する。

(2)農家の生活，農業経営，家族などについて，詳しい聞き取り調査

を行う。

(3)調査結果に基づいて、アメリカ理解のための教材を作成する。

調査項目：(1)家族について

- ・祖先の出身地（国名・民族）
- ・家族の構成（名前・性・年齢および職業）

(2)農業経営について

- ・ここで農業を始めたのはいつか（その理由は）
- ・経営面積（借り地もしくは貸し地はあるか）について→それはこの地域で平均的であるかどうか
- ・作物（および飼料作物）について
- ・栽培の方法（輪作はどのように行われているか）
- ・請負業者に収穫させているか
- ・肥料および農業について
- ・家畜について
- ・出荷の方法について（農協または企業—アグリビジネスとの関係）→どこに出荷しているのか，輸出は
- ・人を雇っているか
- ・収入（年収）について
- ・他の収入は（兼業であるか）
- ・支出（その内訳）について，借金はあるか
- ・農業機械はどのようなものを使っているか
- ・農業施設について
- ・州や政府の農業政策に対してどのような意見を持っているか
- ・農業に対し，どのような意見（展望，将来のこと）を持っているか
- ・後継者はいるか
- ・農業経営に問題はないか

(3)農村の生活について

- ・生活は楽か
- ・ここでの生活に満足しているか
- ・住居について
- ・日々の食事について
- ・余暇の過ごし方について
- ・趣味について

(4)ものの考え方・価値観

- ・宗教について
- ・結婚，家族についての考え方
- ・政治に対する関心は
- ・近所との付き合い
- ・コミュニティー活動，ボランティア活動など
- ・若者，老人問題

4. 事後研究

(1) 第5回研究会

- ① 日 時：1993年9月11日（土） 15:00～20:00
1993年9月12日（日） 9:30～15:00
- ② 場 所：広島大学学校教育学部会議室
- ③ 内 容：教材開発のためのワークショップ
 - ・各研究チーム別のアメリカ合衆国での現地調査及びワークショップの報告
 - ・研究チーム別の教材作成（分科会）
 - ・研究チーム別の教材の報告（全体会）
- ④ 資 料：第5回研究会の日程，報告書作成要領，現地調査及びワークショップの自己評価集計表，研究チーム別の現地調査報告書（和文・英文），研究チーム別の教材案（和文・英文），その他

(2) 第6回研究会

- ① 日 時：1993年10月11日（月） 10:00～18:00
1993年10月12日（火） 9:30～15:00
- ② 場 所：広島市国際青年会館研修室（アステールプラザ），本川小学校
- ③ 内 容：イーストカロライナ大学メンバーを迎えてのフォローアップ会議
 - ・ECUメンバーとの打ち合せ
 - ・研究チーム別の教材の報告・質疑応答（全体会）
 - ・研究チーム別の教材作成（分科会）
 - ・授業「くらべてみれば一日米小学生の学校生活」の見学（庄野英憲教諭，広島市立本川小学校第5学年）
 - ・広島市のフィールドスタディ
- ④ 資 料：第6回研究会の日程（和文・英文），参加者一覧（和文・英文），研究チーム別の開発した教材（和文・英文），庄野英憲「社会科学習指導案」（和文・英文）

(3) 第7回研究会

- ① 日 時：1993年11月14日（日） 10:00～15:30
- ② 場 所：広島大学学校教育学部会議室
- ③ 内 容：
 - ・本年度の研究の自己評価
 - ・國枝マリ先生のアメリカ調査の報告
 - ・来年度以降の研究の検討
- ④ 資 料：第7回研究会の日程，広島大学国際理解教育研究会1993年度の研究報告，広島大学国際理解教育研究会1993年度の研究の評価，研究チーム別の1993年度の研究の自己評価，國枝マリ「米日財団アメリカプロジェクト調査報告」，その他